

昭和五十二年二月二〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額300円 6カ月前納制

△もくじ△

■巻頭言■

ヤミ給与とカラ出張 2

現代のドン・キホーテ 3
—— 馬場宏二氏の頭脳の「窮乏化」——

「労使協力」が景気回復の主要因 7
—— 七九年版「日本の労働経済事情」(日経連)から ——

▽向坂逸郎著『労働者とともに』を読んで△
現在の労働運動を考える絶好の書 9

■マルクス・レーニン主義とは何か^{③⑥} ■
社会主義政党と「政策」 12
—— 『構造改革論と改良主義的性格』四 ——

「トライ・アンド・エラー」(1) 15
⌋
ⓧ&ⓔ 思想界の「難民」 15

緊急号外「道」批判者たちへの反批判発行のお知らせ 16

旬刊社会通信

NO.68 一九七九年一月一日

一九七九年一月一日
(毎月一日・二日・三日三回発行)

■ 巻 頭 言 ■

ヤミ給与とカラ出張

この頃、にわかには地方自治体や公社、公団などのヤミ賃金、カラ出張の問題をマスコミが大々的にとりあげはじめた。高い税金と公共料金に悩まされている庶民の感情をうまく利用して関係労働者の賃金切り下げと首切り合理化攻撃を正当化しようという陰謀であることはまちがいない。千葉県市川市では、条例できまっている職員の出勤時間は午前八時三〇分であるのに、じっさいは九時に出勤している。その差三〇分間に相当する賃金はヤミ賃金だから返却させる、というような住民からの請求がおこされたという。

お役所の労働者は、ろくな仕事もしないでけっこう高い賃金をもらっている上に、倒産や失業の心配もない、親方日の丸のいい身分だというデマ宣伝はかなり深く信じこまれている。

もちろんこれに対して自治労や政労協など関連する労働組合は正規の団体交渉の決定にもとづいて支給されているのだからヤミではないと反論していることは正当である。

しかしこれらの反論が何となく言い訳のようにきこえて迫力がないのは、賃金とは労働力の再生産費であるという原則をはっきりと打ち出していないこと、及び労働者の生活実態を明かにしていないことによると思う。

東京のある区役所の労働者の生活はこうだ。「親といっしょに生活しているが子供が二人になって家がせまくなったのでマンションを借りて別居した。家賃六万円に子供の保育料が四万五千円で妻の賃金はなくなってしまう。

夫の手取り賃金一〇万円では親子四人は食っていけない。三年間位下着など買ったことがない」。

つまり労働力商品の再生産に必要なもとでをとりかえすこともできない低賃金なのである。企業にたとえるならとくに倒産しているわけである。この社会を支えているもっともだいたいな働き手である二〇代、三〇歳代の労働者が、夫と妻の二人分の賃金を合わせてもやっと一世帯の生計をまかない得るかどうか、綱渡りのような生活を強いられている。

このような低賃金という土台を無視して、その上にチョッピリもり上げた塩のような部分であるヤミ賃金とカラ出張がさわぎだてられている。もっと大さわぎをしなければならぬのは低賃金の労働者の生活実態である。

労働者の生活の赤字を告発する運動、労働者の唯一の売りものである労働力の再生産もできないような安い価格で買いたたい労働者をこき使っている自治体や企業の責任を追及する運動を統一的に展開することである。

企業別労働運動の産物であるマル秘協定で賃金の上積みや一時金のプラスアルファをとってきたわが方の弱点を自覚することだ。

現代のドン・キホーテ

——馬場宏二氏の頭脳の「窮乏化」——

一、馬場宏二という人

八月二日の毎日新聞は、『社会主義への道』全面否定、社会党『大内グループ』が『綱領』の批判、M・L革、命理論の清算促す』という一面トップ大見出で、堀氏ら右派幹部とむすびつく新田、大内氏らの『綱領』批判文書提出の動きを伝えた。『綱領』批判文書「道の基本的理念」(労働者自主管理研究5号)の基調報告者は馬場宏二(東大助教)であるという。いままで聞いたこともない、この馬場宏二氏とは、どんな人物だろうか。さいわい、基調報告の「まえおき」で、自分がどんな人間であるかを述べておられるので、引用させて頂く。「そもそも私は組織的な運動を一切やったことのない人間でありまして、『宇野理論で、理論と実践の切断』という話があると、これをどう処理したらよいか分らない人間ですが、『大内先生に二〇年あまりぶらさがって、マルクス経済学を勉強してきた人間』です、と自己紹介している。

この「ぶらさがり助教」が、日本社会党からマルクス主義を放逐する策動にかりだされ、お先棒をかついでいる。大内教授から、『道』批判の基調報告を「いいつけられ」と、そのことが客観的にどのような政治的効果をもつか、自分がどのように政治的に利用されどういう政治的立場にたつことになるかなどには、とんと無関心で、「先生のおことばなら」と「お引き受けしたわけでありませう」(八頁)。したがって馬場氏には新田、堀氏ほどの『道』憎しの執念はない。あるのは、東大助教の看板をぶらさげたおしゃべりと、「普通の人」(九頁)とくらべて自分のほうが頭がいいと思っっている自惚れと、人を落第させることを当然と思っっている教師根性である。

こんな馬場氏がもっとも批判するのは『道』の文体である。「横着をしようと思っまして……電車の中でざっといっぺん読んでみようと思っただけですが、どうしても終りまでいかない。……ともかく文章が非常に読みにくい。その文章の読みにくさをさらに分析すると……内容における折衷性に由来するビジョンの伝わりにくさ……それだけではなくて、はつきりいってしまえば、作文力の不足に由来する分かりにくさがあるのではなからうか」。これが『道』を読んだ「率直な印象」だそうだが、馬場氏の『道』批判の口は、それほど『率直』ではない。文章が読みにくい、分りにくいということから、いつのまにか、それは、内容が不明確で分りにくいからだという『道』の内容批判にすりかわってゆくからである。一例をあげてみよう。

二、『道』の論理は明快

『道』の文章。世界的に類例を見ない程の急速の資本蓄積が行なわれているにもかかわらず、国民のための社会資本の投下が著しく立遅れているのも特筆すべきことである。住む家なく、入るに学校のない社会、上・下水道や清掃が整備されず子供に遊び場の与えられていない大都会、交通事故、公害、工場、鉱山、農村の災害で人命の損傷が日常化した世の中、これらすべては、日本の特色であると同時に、儲ける施設は作り、儲けない施設は作らないという資本主義社会特有のものであることもまた否定できない。

この『道』の文章について、馬場先生はつぎのようにおっしゃる。

「ここでは、いわゆる社会資本―これを宇野先生流にいうと『社会資本は資本かね』という話になって、経済学でややこしいのですが―いわゆる社会資本の投下が遅れていることを指摘している。これはこれで事実の列挙ですから構わないと思うのですが、文章としてはちょっと息が長すぎて、いっぺんには読み切れない。もう少しそのへんの工夫があってしかるべきではなかったか。そういうわけで、ここいらは経済学者として一番議論をすべき論点だろうと思いますが、それがよく分からないというのが最大の問題であります。『道』の文章は「息が長すぎて、いっぺんには読みきれない」そうである。たしかに、「電車の中でざっと」読むには週刊誌とはちがって「読みにくい」かも知れない。しかし右に掲げた『道』の文章と馬場先生のお言葉をくらべてみたとき、どちらが分り易いだろうか。『道』の文章は息が長いかも知れないが、論理は明快で分りやすい。馬場氏の議論は、ことばは息が短かいかもしれないが、論理は飛躍し、内容がない。「そういうわけで」などと、いかにも前の文の論理的帰結として次のことがでてくるように、大学教授風にもっともらしく発言しているが、つぎの四つのこと、すなわち(1)文章の息が長すぎていっぺんには読みきれないこと、(2)文章が分りにくいこと、(3)文章の論理的内容が分りにくいこと、(4)論理的内容として、まちがっていることを区別していない。馬場氏は、(1)をいって、「そういうわけで」(3)(4)であるといわれる。あるいは(3)(4)であることをほのめかす。

馬場氏がなにかにつけ、ひきあいだしてくる「宇野先生」とやらは、「理論と実践の切断」、マルクス経済学とマルクス主義の切断を論理的に説明しようと努力した人だ。そうだが、馬場氏の論法でゆけば、宇野氏の著作など、「作文力の不足に由来する分りにくさがある」と、「文体論だけで落第」の見本であろう。馬場氏は、『道』の学習会が本当におこなわれたかどうかを堀氏に質問しておられる(二七頁)が、心配御無用、『道』の学習会は、日本中いたるところで、地域の党員、社青同盟員、シンパによりおこなわれたし、おこなわれている。そのときでてくるのは、『道』の文章でいって言えば、分りにくいのは馬場氏の文章であり、よく分るのは『道』の文章であるという声である。これが民の声だ。たしかに『道』の文章は、「電車の中でざっと」読むには、スポーツ新聞や週刊誌、小説ほど読みやすくないであろう。しかし、そこにかかれているのは、われわれ労働者にとって切実な問題である。だからわれわれ「普通の人」にも分るので。チューターと教人の学習仲間を読んだ経験からいって、たしかに言葉や文体は分りにくいところもあるが、論理的内容は、ひじょうに分りやすい。分らないのは、論理的な関連もないのに、やたらに「そういうわけで」ということばで結論を押しつける馬場氏のたわごとである。こんなぶらさがり助教授が、さも自分は名文家であるといわんばかりに、「素直に日本語として読んでも分りにくい。私なんかこれでも、とにもかくにも大内先生に二〇年あまりぶらさがって、マルクス経済学を勉強してきた人間ですから、その人間が読んでこのくらい分りにくかったら、普通の人が読んだらまるっきり分からないのではないだろうかと思えます」(九頁)とのたまわる。

三、貧困なのは馬場氏の頭脳

もう一つ、馬場氏の文体批判をあげてみよう。

馬場氏のことば。「次のセンチンス、これもだめですね、日本文として」。

『道』の文章。「しかしながら、社会主義体制のなかで、その国の革命前における資本主義の発展段階や民主主義の定着の度合によって、あるいはまた、その国の革命後の社会

主義建設の発展の差によって、革命の方式や国内的課題にそれぞれの特徴を持ち、かつての如きソ連を中心とする一枚岩的な世界体制から、社会主義の原則を貫きながらも、社会主義革命の多様性とその上に立った新たな国際連帯が生れつつあることも注目すべきである。馬場氏のことば。「ここでいっていることは、社会主義体制の多様性ないし多様性というものをいいたいのか、そういうことがあるながら、実は社会主義を本当は一枚岩なんですよといったことをいいたいのか、文章が長すぎるということとあいまって、読んだだけでは分からない。以上のところで、総合的な世界観なり、世界認識なりを述べたことになのでしょうが、全体として何をいっているのか分らないです。私も大学院をもっておりまして、大学院の入学試験の論文なり、なんなりをよく読まされるのですが、多分、こういう文章を書いていたら落第です。文体論だけで落第です」(一三頁)。

『道』の文章では、社会主義の原則とは科学的社会主義つまりマルクス主義であり、その具体的適用のあらかたは各国ごとにちがうことが明確にのべられている。「文章が長」いかもしれないが「長すぎる」ほどではない。むしろそれは、細かく検討し、よく考えられた文章である。マルクス主義の原則は一つだが、具体的適用のありかたは多様だということが馬場氏のように「多源性」か「一枚岩」かの二つに一つ、どちらかにきめつけなければおさまらない人にとっては、「全体として何をいっているのか分らない」ことになる。「分らない」のは、『道』の文章のせいではなく、馬場氏のもつ「多源性」かつ「一枚岩」という図式のせいであり、こういう図式でしか考えられない馬場氏の頭脳のせいである。ところが、自分の頭の程度については棚にあげて、「文体論だけで落第」の引導を、多くの東大大学院入学志望者に渡し、その勢いにかけて『道』にも落第の判を押そうというのだからあきれる。しかし、馬場先生、大学のなかでは落第の印をちらつかせて、哀れな学生諸君をおびやかすことができても、大学の外ではそうはいきませんよ。

四、「多元論」という名の市民社会イデオロギー

馬場氏の文体批判の例を二つ紹介したが、その批判の仕方は、(1)文章が長い(2)イメージが伝わってこない(3)だから議論の仕様が、というきわめて高踏的ものである。自分が持っている「多源性か一枚岩か」という枠組みに合わなければ、もう、イメージが伝わらない、議論の余地なしと放言してはばからない。これが科学的に議論する態度だろうか。東大助教授というのは、もっと真摯に、事実こそくして科学的な研究と討論をする人ではなかったのか。東大大学院を志望する全受験生諸君、こんな助教授がおさまりかえっている白い巨塔で、マルクス主義抜ききのマルクス経済学、理論と実践の切断を教えこまれるくらいなら、「文体論だけで落第」させられるほうが、負け惜しみでなく幸いである。馬場氏は、「多源性か一枚岩か」というマスコミからの借物の図式を『道』にあてはめて批判するだけでなく、その通説の枠組みそのものを事実にもとづいて科学的に批判すべきである。宇野理論では、科学とイデオロギーをはっきりと区別し、マルクス経済学からマルクス主義イデオロギー、唯物史観を放逐するそうだが、知らず知らず馬場氏が利用している図式も、多元論という名の市民社会イデオロギーではないのか。イデオロギーとして階級の見方を排除し、多元論については、これは科学的見方とみなすというのは、左のイデオロギーはイデオロギーだが、右寄りイデオロギーならば科学だということになる。

五、マルクスズムと商業ジャーナリズム

毎日新聞は八月八日に、スクープ記事とともに、準備よろしく「社会党『道』と『批判文書』の主な対立点」という解説記事までのせた。習三日には、社説で「社会は『綱領』論争に取り組み」を訴え、ヒトクチ漫画にもとりあげるといふ念の入れかたであった。このことにより明らかにされたことは、社会党の右派幹部およびそのブレインと毎日新聞とのあいだに、情報もらしのパイプがあるということであろう。

一九七七年夏から、独占資本、それにつらなる報道機関、出版社は(1)社会党からマルクス主義を排除すること、(2)党内抗争の悪イメージをふりまくこと、(3)社会党を階級政党から国民政党にかえてしまうことに努めてきた。選挙を目前にした時期に、綱領批判文書がだされ、協会がいるから社会党はだめなのだなどという協会攻撃がなされ、党内抗争のイメージが流布されることが選挙にとりマイナスであることはあきらかである。独占資本家はこのような政治的効果を新聞社に期待している少数の右派幹部と党外大学教授グループの研究会の座談記録を一大政治文書にまつりあげ、社会党の社民連化工作をはかること政治的背景について、われわれ社会党員は、もっと深く検討し、研究し、階級的警戒心をもつべきであろう。

毎日にだしぬかれた他の新聞社は、文書提出の翌日、八月七日にいっせいに大内グループの見解を解説入りで報じた。日経はつぎのとおり。「この見解は①『道』はマルクス・レーニン主義が基調になっており、現状に合わないだけでなく、社会主義像の本身も貧弱だ②ソ連などの中央集権的な社会主義ではなく、西欧型の社会民主主義をめざすべきだ③との考え方を基本にしている。…労働者自主管理研究会は大内氏のほか、堀昌雄同党元政審会長、富塚総評事務局長が代表委員となり、ユーゴスラビアの自主管理理論や西独の「経営参加」をモデルに、マルクス・レーニン主義に代わる新しい社会主義像を模索している。この見解はこれまでの反協会各派の『道』批判を体系的にまとめたものとも言え、マルクス・レーニン主義からの脱却を真正面から主張しているのが特徴である」(八・七)。

馬場氏は、自分がこのような大きな仕掛のなかの一歯車として、いつのまにか利用されていることに気づいておられるのだろうか。一介の気楽な研究会報告が、重大な政治文書として扱われ、そのために、多くの労働者、活動家の切実な声がかき消されてゆくことを考えられたことがあるだろうか。馬場氏の発言が、こうも大きくとりあげられるのは、第一に、社会党からマルクス主義を排除し、社会党を民社・社民連化しようとする独占資本の策動があり、馬場氏の発言がその流れにのっているからである。第二に、馬場氏が「普通の人」ではなく、「東大助教授」だからである。

わたくしたち労働者、平党员的の声は、かりにそれが短かい文にまとめられたとしても、巨大な発行部数を誇る商業新聞・雑誌に掲載されることなどない。われわれは文章をピラに刷って手配りしたり、せいぜい『社会通信』のような情報誌に掲載したりするだけである。マスコミならぬミニコミの手段にたよっている。このような情報伝達の差別、独占資本の情報操作がブルジョア独占の手段である。

馬場氏には、このようなからくりにたいする階級的警戒心、情報伝達の手段を制約されている労働者階級にたいする共感がない。研究会でお義理の、茶化し半分の『道』批評をしたことが、日本社会党からマルクス主義を放逐しようとする独占資本の策動に深く加担することになったことを、どうかんがえられるのだろうか。自分の特権的地位をひたすら独占資本の社会党破壊攻撃のためにつかう馬場宏二東大助教授を、心の底から弾劾する。

「労使協力」が景気回復の主要因

——七九年版「日本の労働経済事情」（日経連）から——

—

日経連（日本経営者団体連盟）は、恒例の『日本の労働経済事情』を発表した。

同文書はⅠ日本経済の動向と将来への展望、Ⅱ労使関係とその問題点、Ⅲ賃金および労働時間の動向、Ⅳ労働力事情、Ⅴ日本経済が当面する主要な問題点、から成り構成には変化はないが、内容のうえでは大きな変化をみせている。

それを典型的にしめすが、一九七四年に設置された「大巾賃上げの行方研究委員会」（一九七五年に賃金問題研究会と改称）を新たに再改組して「労働問題研究委員会」とし（一九七九・五）「賃金問題だけでなく、広く労働問題全般に亘って研究を行なう」としていることだ。改組の背景は「この五年間、民間労使を中心にして、日本経済に対する理解が進み、消費者物価の安定に助けられて賃上げ率は一ケタ台に落ちついてきた」（一一頁）というものだ。

つまり、さきの『経済白書』にもみられたように、「五〇六％の成長率がわが国の経済成長の基調として定着」「日本経済はオイル・ショック後の長期不況から脱し、現在、景気上昇の過程に入っている」との認識にたち、今後の方策を明らかにしていることである。七五〇七六年、日経連は「職場に安定帯があり、警察、裁判所、官僚機構がしっかりとしていれば不況は乗り切れる」とのべたが、本年度の報告は、不況の「克服」の原因が、「労使協力」にあったことを鮮明にしている。

「わが国が他の先進工業国に比し、早期にオイル・ショックを吸収し、経済を安定化させ得たのは、政労使が賃金・物価の悪循環を断ち切るために協力しあって来たから」（一頁）。

「一九七三年のオイル・ショック後五年にして、日本経済は労使の協力宜しきを得て、ようやく安定化路線へ踏み出した」（一五頁）。

さらに、「労使安定帯」のあらわれとして「団交重視やストライキの大幅減少」が、「好ましい傾向」（七頁）として指摘されているのが特徴だ。

「労働省の『労働争議統計』によれば、民間産業における労働争議による年間労働損失日数は一九七四年の九六六万日をピークに七五年には八〇二万日、七六年には三二五万日、七七年には一五二万日、七八年はさらに一三六万日と減少をつづけている。七九年には、いわゆるスケジュール・ストといった現象はほとんどみられず、団交重視の機運が台頭していることにより、さらに減少するものとみられる」（八頁）。

二

こうして、今後の方策が次のようにのべられる。

表 労働争議と損失日数の国際比較

	日 本			ア メ リ カ			イ ギ リ ス			西 ド イ ツ			フ ラ ン ス			イ タ リ ア		
	労働争 議件数	労働損 失日数	雇用者千 人当り 労働損失 日数	労働争 議件数	労働損 失日数	雇用者千 人当り 労働損失 日数	労働争 議件数	労働損 失日数	雇用者千 人当り 労働損失 日数	労働争 議件数	労働損 失日数	雇用者千 人当り 労働損失 日数	労働争 議件数	労働損 失日数	雇用者千 人当り 労働損失 日数	労働争 議件数	労働損 失日数	雇用者千 人当り 労働損失 日数
	(件)	(千日)	(日)	(件)	(千日)	(日)	(件)	(千日)	(日)	(件)	(千日)	(日)	(件)	(千日)	(日)	(件)	(千日)	(日)
1970年	2,260	3,915	118	5,716	66,414	895	3,906	10,980	479	129	93	4	3,319	1,742	107	4,162	20,887	1,606
1971	2,527	6,029	177	5,138	47,589	671	2,228	13,551	616	624	4,484	198	4,358	4,390	271	5,598	14,799	1,125
1972	2,498	5,147	149	5,010	27,066	372	2,497	23,909	914	54	66	3	3,464	3,755	229	4,765	19,497	1,501
1973	3,326	4,604	127	5,353	27,948	357	2,873	7,197	324	732	563	25	3,731	3,915	233	3,769	23,419	1,769
1974	5,211	9,663	266	6,074	48,045	619	2,922	14,750	662	890	1,051	48	3,381	3,380	205	5,174	19,467	1,429
1975	3,391	8,016	220	5,031	31,237	406	2,282	6,012	265	201	69	3	3,888	3,870	236	3,568	22,673	1,996
1976	2,720	3,254	88	5,648	37,859	477	2,016	3,284	146	1,481	534	25	4,348	5,011	303	2,667	16,464	1,844
1977	1,712	1,518	40	5,506	35,822	436	2,703	10,142	447	81	24	1	3,302	3,666	218	-	-	-
1978	1,517	1,358	36	4,300	39,000	455	2,349	9,306	410	1,239	4,290	204	-	-	-	-	-	-

資料：日本 労働省「労働争議統計調査」

外国 ILO "Yearbook of Labour Statistics", その他各国統計による。

注：①日 本 半日以上同盟罷業および作業所閉鎖の計、労働損失日数は、実際に争議行為に参加した労働者についてのもの。

アメリカ 参加人員が6人未満の争議と継続期間が1日または1交替の勤務時間の期間に満たない争議を除く。

イギリス 雇用条件または労働条件に関係のない争議を除く。労働損失日数が100労働日を超えない限り参加人員が10人未満の争議または継続期間が1日未満の争議は含まれない。

西ドイツ 労働損失日数が100労働日を超えない限り継続期間が1日未満の争議を除く。

フランス 農業と公務を除く。

イタリア 政治ストと間接に被害を受けた労働者を除く。

アメリカ 1978年は速報値。

「過去五年間の経験から、われわれは、外洋の荒波から日本経済を守る防波堤は、民間
 労使の良識ある協力であることを学んだ。この経験を生かすことが、今後の難局に対処す
 る方策である」(一七頁)。
 同文書にたいへん興味ある資料が添えられているので、(1)労働争議と損失日数、(2)労働
 争議と損失日数の国際比較の二つを(ハ資料)として掲載しておこう。この二つの資料は、
 労働運動の課題が資本とたたかうことにあることを示しているからである。

◇向坂逸郎『労働者とともに』を読んで◇

現在の労働運動を考える絶好の書

反合理化闘争の重要性を再確認

「レーニンはこのことをいつている。働く人民は自分自身のほかに誰も頼ってはならないし、誰も当てにしてはならない。働く人が自分で自分を解放しなければ、彼らを貧困から解放してくれる人は誰もいないだろう。だが自分を解放するには、労働者は全国にわたって一つの国体、一つの党に団結しなければならない。」

労働者を貧乏から解放してくれる人は、労働者自身の外にいない。労働者はみずから解放する外にはない。労働者は団結する外には解放する力をもたない。労働者の団結の手段には、いろいろあることを知らなければならない。労働組合の団結や労働者政党的団結である。これが根本の問題である。搾取者と被搾取者との団結、支配者と被支配者との間に、団結はない。このことを間違えてはいけない。

これは、この書のとがきの最初の文です。私は、この『労働者とともに』を読み通してホッと、"さあ最後のあとがきだ"、と気楽な気持ちであとがきの部分を読みはじめました。ところが、今、紹介した部分からなかなか先に進まず何回もこの部分を読みかえたのです。私たちをとりまく労働運動、社会主義運動の動向や知人、諸先輩の顔などがあるいろいろ脳裡を走り、"一体、俺たちの運動はこの点どうなんだろう"と問いかえざるを得なかったのです。階級闘争というからにはごく当り前のことなのですが、このことが日常の運動のなかで意識化されているのだろうか、と"ハッ"としたのです。

そこで、"私はまたこの本を最初から読みかえし、①今、一番欠けているのは何か（"力"）、②その力はどうしたら生まれるか（学習と職場闘争）、③組織強化（労働組合や党）などいろいろ考えました。

今日、不況のなかで「企業あつての労働者」という「常識」のもとで多くの仲間たちが首を切られています。出向・配転、希望退職、指名解雇と首の切り方はちがいますが、労働者が職場から放り出され生活のカテを失っているのです。その結果、労働者は生活苦や将来の不安を苦に一家心中したり、わが子を殺したり、あるいは、サラ金や盗みなどに追いやられているのです。

首切り、失業、これは今、労働者一人ひとりの切実な問題になっているし、"一人の首切りも許さない"という労働組合のたたかう団結が強く求められています。"資本と闘う以外に労働者の生活は守れない"という、この当り前のことが今日の労働運動のなかでは十分には理解されておらず、反合理化闘争を力強くたたかう、ということにはなっていないのではないか。

なぜだろうか？、どうすればこの弱さは克服できるだろうか？

労働者が社会の主人公

一切の富を「生産しているものはだれか」とやっぱり労働者以外にない。労働者が日本のすべての労働者や、農民もふくめて、いっさいの人が働くことをやめたら、日本人は労働者も資本家も死んじゃいますね。日本文化というものもない。ただ日本列島が残るだけです。日本列島の上に日本文化が続いているのは働く人間がいたからです。

「闘う個々の労働者が意識すると否とにかかわらず、資本主義の中における労働者階級の地位が、労働者階級の闘いにこの歴史の意味を与えている。労働者階級の闘いに、自信と誇りを与えるのは、このような歴史の意味の理解である。このことがあるために、時として一般市民の損害を顧みないで闘わなければならない。また闘い得、闘いに成功するのである。この歴史の意味なくしては、確信ある指導者にはならない。」

このように、この書は、労働者が社会のほんとうの主人公である。社会を支えているのは人間の労働である、という自覚、そして、その主人公である労働者を虫けらみたいに扱い、労働もしないで多額の金をふところに入れ、ぜいたくな生活をしている資本家にたいする怒り、これから「労働者のすべての運動」ははじまる、と言っています。

「労働者を人間らしく扱え！」「赤字でも労働者の生活が先だ」という力強い仲間の主張とたたかいてもやはりここから出発しているのだと思います。「企業倒産よりも合理化がまだ」という形の運動を克服するためにも早急に労働者思想の確立が求められます。日本で最強と言われた三池労組は特別な人が集ったのではなく「ただひたすら労働者であろうとしたから、そうなったのである。労働者の誇りを資本に売るまいと心がけたから、そうなったのである」とのべられています。私たちがほんとうに努力したいものです。

さらに、組織された「力」の確立について、それは「学習と労働者の最も卑近な闘争を土台にする以外はない。日常、近辺の労働条件の改善に出席する職場闘争は、再び反省され評価されなければならぬことを、急迫せる合理化反対闘争が示しはじめた」とのべています。

今、私たちは「生命と権利」のたたかいを全国の仲間とともに追求していますが、この書を読むとますますその重大性を思うし、マルクス経済学の学習の強化が重要だ、と痛感せざるを得ませんでした。

労働運動の原点が問われている

最後に、労働組合運動の今日的意味について学んだ点を簡単にのべてみたいと思います。今日、本人が知らないまに組合費を賃金から引かれていた、というような労働組合加入の実態がありますが、労働者は、労働組合に組織されてはじめてたんなる資本の奴隷から、「社会の発展を自分自身の中に蔵している生産階級が、団結によってのみその本来の歴史

的使命を達成出来ることを「学ぶし、「自分の力を確信し、自主的な個人となることによつて、近代労働者は」主体的に、組織的にたたかいに立ち上がったという。よく、労働運動だけでは……という声を耳にしますが、労働組合運動のもつ意味をしっかりと学ぶことが大切だとつくづく思います。

日常の職場改善闘争をしつかりたたかっている組合の組合員が、選挙その他の政治闘争や反戦・平和のたたかいに結集する。また、より労働者のな生活態度を身につけている、この事実、このことの意味を真剣に考えてみる必要があります。ぜひ、自分の身近な仲間をあいで対論し、労働運動の今日の意味を全体的に確認したいと願うものです。この書のなかから一、二紹介して、「労働者とともに」の紹介を終わります。

「賃金が高く、労働時間が短くないと、本も買えず、また読む暇もない。教師自身の教養も高くない、人間の修練も出来ない。したがって教師にふさわしい人間をつくることも出来ない。賃金を引き上げ、労働時間を減らすことは、すぐれた教師になるための運動でもある。教師が思想の自由をもち、政治行動の自由をもつことは、教師自身を考える人間に仕立上げて、教師が生活と文化を高めるために貢献する必要な条件である。

このように考えると、労働組合運動は、立派な教師となる条件をつくる運動である。」「地方をまわっても、労働組合の中で『安保』は口先だけで、労働者の血や肉となっていない。労働者の最大の問題は、首切り、失業の問題である。技術発達は目の前にある。失業の不安も目の前にある。総評最大の問題は、労働者の立場からどのように失業と窮乏の危険に対処するかであろう。このような労働者のはだで感じられる問題のために献身する幹部や活動家の語る『安保』だけが、充分な説得力をもち、理解され、行動化されるであらう。」

こうしたたたかいをにない得る労働組合、社会党の組織をきずき上げていこう。ぜひ、この書を読んで自分たちの活動を見直してみよう。同書は労働大学刊、九五〇円。（千葉・K）

◇読者からのたより◇

本誌、第六六号に「靴労働者のたたかい」をのせたが、筆者から次のような手紙をもらった。たたかいの新しい動きが添えられているので、そのまま紹介する。

「第六六号、ありがとうございます。僕の前稿はボツかと思っていました。編集にご苦勞されているのだという事が判りました。今後も頑張ってください。

この間、八月三〇日、資本家は追い打ちをかけて合理化を付けてきました。①従来の執行委員長（組合専従で、労使協定上は半日専従、ヤミ専の半日で一日専従）の組合専従は全従業員に働いてもらうために認めない、②二年前に協定した土休一日返上（最終土曜のみ出勤）は協定切れの十月以降も最終土曜日は出勤とする、③年間五日間の冬・夏休みの協定は破棄し出勤とする、というものです。私たちは取り下げ団交をした後に、反対闘争を組むことになりました。全靴労連も支援します。」

■マルクス・レーニン主義とは何か③⑥

社会主義政党と「政策」

——『構造改革論と改良主義的性格』(四)——

社会党は「行動の党」になれ

山口 さて第三節は、「社会党は何をなすべきか」「労働者階級にとって政策とは何か」が論ぜられています。それにたいする向坂氏の回答は「行動の党になること」だということです。

歴史は人間の思うがままにはつくれません。歴史の法則を認識してたえず準備をする。つまり抵抗闘争をつうじて組織の強化、拡大をはかる。そうした改良闘争によって蓄積され、豊富化された組織の経験と社会主義者の政治的自覚が、特殊な歴史的条件のもとで、社会主義革命として爆発します。しばしば、『道』や社会主義協会テーゼに「革命待望論」なる中傷、誹謗、悪罵が投げかけられますが、社会主義運動を彼らがいかに知らないかを自ら証明して見せてきているようなものです。「天に向かつてつばをする」とのたとえがあるが、それを地で行くようなものです。マルクス・レーニン主義者ほど日常的に労働者階級の生活と権利を守り、日常闘争、改良のたたかいに全力をつくす者はありません。社会党、労働組合のなかでみずからの生活を犠牲にしてたかっている者の多くは左派の人じゃないか、との感想が述べられていることによっても、それは明らかです。この問題は社会主義運動、労働運動のもっとも大きな問題です。したがって、みなさんと議論していただきたい問題でもあります。

精神的影響力ということ

第三節、行動の党になること、の内容に入ります。

冒頭、社会党の『闘う構造改革』を読んだ感想がのべられる。「いうべきこと」が「余りにたくさんある」(『日本革命と社会党』、一九六頁)としながら、ただ一点だけをのべると次のように書いている。

「それは、構造改革としてかかげられた政策を、どのようにして遂行するか、その遂行する力はどこにあるか、その遂行する中心の力が労働者階級であるならば、社会党はまず何をしなければならぬかということである。この問題にたいして明確な態度をとりえないかぎり、百千の政策をならべ、左翼の言辭を弄もてあそんでも、改良主義の泥沼のなかでもがいているとしかみえない。革命する力の欠如した左翼の言辭ほどうつろにひびくものはないからである」(同、一九六頁)。

つまり、社会党は「力」とならなければならぬ。そのためには、労働者階級のあいだに

しっかりとした精神的影響力をもたねばならない。これがないとき、どのように立派なことをいおうとも、どのように政策をならべようとも空文句にすぎぬといわれている。私もそう思う。職場の権利一つをとってもやはりそうです。分会の委員長、書記長がどれほど熱弁をふるい、机をたたいたところで、後に分会員の姿がなければ、当局はせせら笑っているだけです、ところが、委員長、書記長が黙っていても分会の組合員に迫力のあるとき、当局はふるえている。最近、当局の姿勢はかなり高くなっています。

次に、当時の構造改革論者の「まことに勇ましい」（同、一九七頁）ことは紹介されています。

「この小冊子の一節に」……そこで、どうしても労働者階級と中間諸階層とが、独占ブルジョアジーの搾取や抑圧の出でくる根元——独占体の基本政策や政治経済構造に目をむけてそれを改革してゆけたたかいたとくむむむが必要になる。しかも、そのような闘争は、敵が攻撃をしかけてきてから、抵抗するというのでなく、むしろこちらから進んで先制的に攻撃を加え、独占ブルジョアジーを包囲し、孤立させるたかいたとならざるをえない……」（同、一九七〜七頁）。

吉田 「民主的規制」といわれる路線、「八〇年代労働運動」といわれる路線とソックリですね。

樹徳 改良主義は主観的にどうであれ、本質はちっとも変わらない。

南 つねに新たな衣装をまといてあらわれる（笑）。ところが、衣装の下は同じだ（笑）。彼らはマルクス、レーニンが古いというが、彼らの依拠する理論の根源はマルクスやレーニンよりもっと古い。ブルードン、ルイ・ブラン、ミルランが彼らのご先祖さんだもの（笑）。

山口 いわゆる「新左翼」といわゆる連中も同じだ。彼らのご先祖さんはブランキーであり、バクーニンでしょうから。ちっとも新しくない。

司会 向坂氏の論文は一九六二年に書かれている。わずか一七年前ですね。そして、こんにち同じような状況が現象的にあらわれている。労戦統一（再編）問題も同様です。その解決策は歴史が教えている。

六〇年代の情勢と今日

鈴木 司会者は状況が同じだとおっしゃったが、それを生みだした背景はちがいますよ。六〇年代は高度成長の時代でしょう。今はどうですか。まったくちがう。政府統計ですら一〇〇万以上の完全失業者でしょう。しかも、企業別労働組合の客観的条件が崩壊されつつあるんですよ。こういうとき、独占の攻撃はなりふりかまわぬ状況をおびるんじゃないんですか。全通には大量処分、国労には「処分凍結」の攻撃でしょう。じつに巧みですね。私たちは、敵の「はげしい」攻撃、「巧みな」攻撃と一言でいってしまいがちですが、その中味を正確にとらえ反撃するかまえば必要です。もっともっと緻密に調査、研究、討論することですよ。そうしないと、敵の思想攻撃をともなった組織づくりはわからない。

問われているのは「組織づくり」ですからねエ。

松井 今、鈴木さんがいった第一歩は学習です。理論と実践の統一をみずからが自覚することです。

司会 みずからのやっていることを自覚して、運動は質・量ともに高くなる。

松井 そうです。そのためには勉強が必要です。

言葉だけは勇ましい改良主義者

山口 つまり、大言壮語ではなく、日常闘争をつうじて組織を強化、拡大することが、政策・要求を実現する力となる。このことを忘れてはいないかというのが、向坂氏の眼目です。ですから「勇ましい」ことばに向坂氏は次のような疑問を発しています。

「こちらから進んで先制的に攻撃を加え、独占ブルジョアジーを包囲し、孤立させるたかい」という。われわれは社会党の現状をじっくり反省しようではないか。だがどこで先制攻撃を加えるのか、先制攻撃とは議会で演説することだろうか？ 演説でだけなら、できる。しかし、敵を「包囲し、孤立させる」という包囲する兵隊はどこにいる！ 社会党に五万（！）の党員がいる。この全員が忠実な社会党員であったとしても、「独占ブルジョアジーを包囲し、孤立させる」と叫んでごらんなさい。うつろな山彦のみがきこえないか？」（同、一九七頁）。

そしてみずから回答しています。

「党に欠けているのは、政策の考案や口舌の論議ではなく、やろうという人間である。行動である。これで「独占ブルジョアジーの搾取や抑圧の出でくる根元」に先制攻撃をかける！ 何かおかしくないか？ いったとたん冷汗がでないか？ せっかく頭のいい構造改革論者が知恵をしばった政策も、謄写版ずりになって戸棚にしまわれると、万事がおしまいになる」（同、一九八頁）。

こんにちはやりのことばは、独占を「先制的」にやっつける。そのためには反合理化闘争だけではだめだから政策闘争を、とたとえば「民主的規制」なる新語がつくりだされています。一見勇ましいし、「なるほど」と思わされるところもある。巧妙にカムフラージュされていますからね。だが多くの労働者は「ちょっと待てよ」と眉にツバするというのが現状です。向坂氏は、この「先制的に攻撃をかける」ということが、どれほど資本主義を知らない者のことばであるかを完ふなきまでに批判する。たいへん迫力ある箇所ですから、次にその全文を報告しておきたいと思えます。

（つづく）

「トライ・アンド・エラー」(1) 思想界の「難民」

トライ・アンド・エラー というコトバがある。日本語でいえば、「試したり」「けつまずいたり」…ということになるが、余韻として「成功したり」も含めてよからう。「試行錯誤」を新村出の辞書でひいてみると「試みと失敗とを反復しながら課題を追求する」とある。本欄 ①&②では、とくに後段の「…課題を追求する」に力をいれたい。つねに確証を持ちながら…。

さて、①&②の第一号に佐藤経明氏に御登場願った。七月二十八日に社会党理論センター（勝間田所長）主催のシンポジウムがあった。テーマは「現代社会主義」である。出席の学者が殆んど党員でないのも肚におちないが、福田豊氏に食ってかかっている佐藤経明教授のタララの踏み方をまず御紹介しなければならぬ。佐藤氏がもっとも強調したのは、「モデルなき時代に入った」ということであった。この物のいい方は、別のところでも「モデルを超えた二一世紀」などとクローズ・アップしている（於・社会主義理論政策センター合宿・八月十二日・太田潮流）。

佐藤氏の発言要旨をさらにかくつか挙げてみると、
○ 社会主義と資本主義の体制間矛盾は深まっているというが、社会主義国は「国権的社会主義」になってしまっている。

○ ソ連の経済の効率化と民主化は中途半端。

○ 社会党は、ソ連・ベトナム・キューバなどの社会主義にまだ未練を残している。

○ 社会党が北朝鮮と共同声明を発したのはおかしい。

などと発言をしている。佐藤氏がかつて構造的革命はなやかりし頃、江田派のスタッフとして発言をしていたころよりもっと「悪どく」なっているようだ。

このような趣旨の発言は事新しくない。かつて江田氏は「科学的社会主義は、日本にはあてはめると民主社会主義となる」といい、今や経営陣からも頻繁にお座敷がかかっている正村氏は「…古い体系の呪縛」といい、自ら「大内力のカバン持ち」と自己紹介した（七七・七・二六「自主管理」発会式）新田氏は「伝統的マルクス主義の教条主義」といい、大内力氏にいたっては自ら「…私の字野理論」と蠅螂の自己紹介をおこない、「マルクス、エンゲルスの唯物史観は科学的論証をへてないので、根底的再検討を…」と、これまたドン・キホーテ顔まけの発言をしている。

佐藤氏は、社会主義そのものに強い不信をもっているようである。一体、年々さいさい増えて十数カ国をこそうとしている「資本家のいない国」について、基本的にどう思っているのだろうか。事物に矛盾や欠陥があるのは当然である。ツノをためようとして牛を殺してはならない。佐藤氏は「モデル」はいらぬという。「羅針盤」なき船に乗った佐藤・大内・新田氏らは思想界の「難民」ともいうべきではないのか。

（台）

緊急号外（十月一日発行）定価五〇〇円（郵送含）

『道』批判者たちへの反批判

『道』と科学的社会主義の擁護

大内力氏ら党外の学者たちが「修正されたマルクス主義」の立場から、社会党の憲法ともいふべき『日本における社会主義への道』を全面的に批判する文書を発表しました。この文書は、一九七八年、社会党にはふさわしくないと「参考文書」にタナ上げされた「社会主義の構想」を前提にしたものです。

私たちは、氏の「新しい社会主義」分権的・自主管理型社会主義論は、社会党の基本路線を真に正しく補強し発展させるものではなく、まったく反対に、科学的社会主義の一般的基本原則を真向かう否定し、したがってまた、科学的社会主義を日本の情勢に基本的に正しく適用した社会党の基本路線『道』を真向から事実上否定する「社会主義」論だとの立場から、『道』の擁護のために、とりわけあえて増刊号『社会党「中期経済政策（第一次試案）批判」をだして、大内氏らの「新しい社会主義」論、その具体化といつてよい『中期経済政策（案）』にたいして、基本的な批判をくり広げてきました。

われわれの批判が正しかったことは、太陽が東から上り西に沈むように明らかです。大内氏たちはしばしばマルクスや『資本論』を口にします。しかし、彼らの主張はマルクス主義とは縁もゆかりもありません。彼らが、資本主義的蓄積の一般的法則（「窮乏化法則」）を否定することによって、社会主義の必然性をまったく知らないからであり、社会主義の基本原則である、いわゆる「プロ独裁」の理論、社会主義的計画経済を否定し去っているからです。したがって、「これは学者のたわ言にすぎない」と放置することは、絶対に許されません。マルクス主義の思想をめぐる問題だからです。そこで『中期経済政策（第一次試案）批判』の続編ともいう号外『道』批判者たちへの反批判』を発行することにしました。内容は次のとおりです。ぜひご購読をお願いします。

□内容□

序章 発行にあたって

第一章 向坂逸郎氏に聞く——マルクス・レーニン主義とは何か

第二章 高沢寅男氏に聞く——『道』は闘争の歴史そのもの

第三章 階級矛盾なき資本主義論（大内力氏の「現代資本主義論」批判）

第四章 「窮乏化法則」と大内力氏らの頭脳の「窮乏化」

第五章 「プロ独裁」は階級闘争の必然的結果

第六章 「字野理論」批判——大内力氏の理論と思想の基本的性格と特徴

補論 現代のドン・キホーテ——馬場宏二氏という御仁

□価格□

一部五〇〇円（郵送費含）。ただし二〇部以上五〇部までは一部四五〇円、五〇部以上ご注文の方は一部四〇〇円、としその分還元させていただきます。

□注文先□

東京都千代田区飯田橋四の四の八 朝日ビル四〇一号室 社会通信社／郵便振替東京0の58431、労金・東京労金本店№50234

申 込 書

部 数
部 送
部 代
部 金
送付先・電話・貴団体名または氏名

円を添えて申し込みます。